７月２日「京都学ラウンジ　ミニ講座」（開催報告）

２０２０年７月２日
京都学・歴彩館
０７５－７２３－４８３５

京都学・歴彩館では、学びの楽しみを広げる目的で、毎週木曜日に「京都学ラウンジ　ミニ講座」を開催しております。この度７月２日（木）に「奈良時代に猛威を振るった天然痘―歴史の中の疫病流行―」と題して開催しましたので、下記のとおり報告します。

記

■ 日　　時　　２０２０年 7月2日　木曜日１３：３０～１４：００

■ 会　　場　　京都府立京都学・歴彩館 １階小ホール

■ 参加者数　　３４名

■ 内　　容　　講師　　京都府立京都学・歴彩館　京都学推進課　吉岡直人
「奈良時代に猛威を振るった天然痘ー歴史の中の疫病流行ー」

■ 講座の様子

ペスト、マラリア、SARS そして COVID-１９･･･。人類はたびたび未知の伝染病やウイルスに苦しめられ、その度にそれを克服してきた。伝染病の流行は、時代や地域に関係なく発生する。奈良時代の日本でも未曾有の疫病流行が発生する。天然痘の大流行である。１００万人以上の人が命を落とし、時の政権担当者までもが犠牲になるなど、まさに国家的危機であった。律令国家は、備蓄物資の緊急放出を行うほか、神祇祭祀や仏教法会を実施し、事態の沈静化を図った。そうした努力もむなしく天然痘は猛威を振るっていく。多くの人が病に斃れていくなか、人々は何を思い、如何なる疫病対策をしていたのか。平城京跡から出土する木簡・土器・木製品から、はるか昔に疫病と闘った古代人の声を聞いた。中国の故事を引き合いに出し、疫病退散を願う人、人形に病を移し水に流そうと試みた人、疫神を饗応して病気を治そうとした人、それぞれの方法で病に立ち向かった古代人の姿があった。

講師からは「古代人の祈りを非科学的で無知な行動とすることは出来ない。むしろ古代人の精神性は、現代人の精神性に通ずるものがあるのではないか」という話があった。

COVID-１９･･･、未知のウイルスの克服のために一人一人がなすべき事があるのではないか。古代人のささやきが現代人に語りかけているかのような内容で意義深い講義となった。